

「博士論文」合否査定資料

申請者
職・氏名 カーロイ・オルショヤ

学位の名称 博士（日本語日本文化）

論文名 藤原定家による『百人一首』再解釈論—英訳を通して見る定家の解釈

審査委員 主 査 吉海 直人

副 査 森山 由紀子

副 査 野村 倫子

審査結果 合

2019.2.8 日本語日本文化専攻博士後期課程委員会 承認

2019.2.8 文学研究科博士後期課程委員会 承認

博士学位論文審査結果報告書

2019年2月6日

学位申請者	カーロイ・オルショヤ
審査委員	主査 吉海直人 印
	副査 森山由紀子 印
	副査 野村倫子 印
<p>本学大学院生のカーロイ・オルショヤから「藤原定家による『百人一首』再解釈論—英訳を通して見る定家の解釈」という論文で博士学位の申請があった（A4用紙142枚）。これを受けて主査・吉海、副査・森山、副査・野村（外部）の三名で審査にあたった。</p> <p>まず申請に必要な条件（査読付き学会誌掲載）は、「解釈」（解釈学会）に掲載されていることで基準を満たしていることを確認した。その上で2月5日に公開の口頭試問を行い、審査委員の先生方から忌憚のない質疑があり、それにカーロイが丁寧に答えていたことを報告しておく。</p> <p>申請された論文は、「英訳百人一首」の比較検討から浮上する問題点を通して、藤原定家独自の解釈に迫るという非常に斬新な外国人留学生らしい方法で貫かれていた。まず1章序論で『百人一首』を定家がどう解釈したかという本論の研究方針が述べられ、それに基づいて各論が四つの論文から構成されていた。2章の「ローマ字表記からみる枕詞の清濁問題」では、「ちはやふる/ちはやぶる」・「あしひきの/あしびきの」という二つの枕詞の清濁が対比的に論じられ、歴史的変遷を丹念に分析することで、定家の解釈としては「ちはやふる」「あしびきの」であるとしている。3章では「あしびきの」歌の詠歌主体について、これを「待恋」題とすることで女性と解釈すべきことが論じられており、外国人の視点による斬新な論であった。</p> <p>4章の「英訳からみた修辞法の再解釈」では、「浅茅生の小野の篠原」（序詞）・「さよふけて」（掛詞）が論じられ、同音を導く序詞を「有心の序」として比喩的に訳すこと、赤染衛門歌の「さよふけて」には「世・老けて」が掛けられ、それが「傾く」と響きあっていることを論じている。これも外国人の視点ならではの斬新な論であった。5章の「時間表現「有明けの月」・「暁」・「朝ぼらけ」のイメージ」では、英訳が安易に明るい時間帯として訳されているのは、日本におけるほとんどの現代語訳がそうになっているからであるが、最新の研究を踏まえると、定家の解釈としては「有明けの月」や「暁」は暗い時間帯とすべきこと、「朝ぼらけ」は暗い時間帯も明るい時間帯も可能であることを論じている。これは従来の現代語訳の是正を迫るものである。</p> <p>以上の論は一見無関係に見えるが、枕詞から序詞・掛詞と修辞法が検討され、それが「さよふけて」という時間表現を導いており、論者の中ではすべての問題が有機的につながっていることがわかる。しかもその一つひとつの論において、果敢に定家の解釈が提示されている。「英訳を通して」という視点は、日本人にとっては馴染みのないものであるが、外国人留学生の視点として有効であることを確認した。</p> <p>以上により、申請論文は新たな視点から『百人一首』研究を開拓・進展させているものであり、博士（日本語日本文化）の学位を授与するに値するものと審査員一同で認定した。今後とも『百人一首』の研究を継続してもらいたい。</p>	

博士学位論文審査結果要旨

2019年2月6日

学位申請者	カーロイ・オルショヤ
審査委員	主査 吉海直人 印
	副査 森山由紀子 印
	副査 野村倫子 印
論文題名	藤原定家による『百人一首』再解釈論—英訳を通して見る定家の解釈
(要旨)	<p>カーロイ・オルショヤは母国ハンガリーで大学院修士課程を修了後、国費留学生として本学の博士課程後期に入学し、『百人一首』の研究を熱心に行った。外国人留学生とはいえ、日本語も堪能であり、日本語による『百人一首』の研究論文を何本も執筆し、そのうちの一本は「解釈」(解釈学会)という学術雑誌にも掲載されている。そういった研究の蓄積が実って、学位申請論文の提出に至った次第である。</p> <p>『百人一首』は有名な割にはあまり研究されておらず、どのようにしてまとまりのある成果を出せばいいのか難しい側面がある。そこで彼女は手始めに「英訳百人一首」の比較研究を行った。本来は「ハンガリー語訳百人一首」の方が研究しやすいのだが、まだ研究に値するハンガリー語訳が存在しないので、材料が豊富な英訳を選んだわけである。</p> <p>そこから日本人の訳との比較、さらには『百人一首』研究史との比較へと広がっていった。英訳の研究は、むしろ『百人一首』に内在する豊富な問題点を提供してくれるものだったようである。そうこうするうちに解釈の多様性に気づき、『百人一首』の研究においても様々な解釈が存することに思い至ったことで、究極の課題として撰者である藤原定家が『百人一首』の歌をどのように解釈していたかを考えるようになった。これは島津忠夫氏が提起したものだが、日本でもまだ浸透していない新しい研究の観点である。それを英訳を通して考えたところに、彼女の斬新さと独自性が存する。</p> <p>本論では序論に続く2章で、『百人一首』に用いられている枕詞のうち、「ちはやふる／ちはやぶる」という清濁問題が、英訳におけるローマ字表記を起点に論じられている。従来は『万葉集』の読みが重視されていたが、本論では定家(の時代)の清濁を探り、むしろ「ちはやふる」(清音)にすべきことを提起している。これは歴史的変遷の中できわめて妥当な見解である。</p> <p>続いて3章では、人丸「あしびきの」歌の詠歌主体について論じられている。これも英訳を通して詠歌主体が安易に男性にされていることに注目し、特に「待恋」題の場合は平安時代の習俗(通い婚)を配慮し、たとえ作者が男性であっても詠歌主体を女性とすべきことを論じている点、外国人ならではの視点である。</p>

4章では、和歌の修辞法として序詞と掛詞について論じている。序詞としては参議等の「浅茅生の小野の篠原」が同音の「しの(ぶ)」を導くことについて、従来はそれ以上の意味はない(無心の序)とされていたが、英訳では比喩的に訳されることが多い。また定家の本歌取り歌を調査した結果、定家もこれを「有心の序」として解釈していることを論じている点、斬新な解釈として評価できる。

掛詞については、『百人一首』に二例用いられている「さよふけて」を取り上げて論じている。雅経の「みよしのの」歌に関しては「風が吹く」の掛詞として考えられているのに対して、赤染衛門の「やすらはで」歌については掛詞の指摘が見られないが、赤染衛門歌についても「世・老けて」が掛けられていることを論じている点、従来見られなかった独創的な見解と思われる。

5章では、時間表現としての「有明」「暁」「朝ぼらけ」について、従来は明るい時間帯と認識されて訳されているが、最新の研究を踏まえることでむしろ暗い時間帯として考えるべきことを論じている点、『百人一首』研究に再考を迫る視点として評価される。特に「朝ぼらけ」は明るいか暗いかという二者択一ではなく、明るくなる時間も暗い時間も含み込む時間帯として再考すべきことを提起している点、従来『百人一首』研究に一石を投じるものである。

以上、カーロイ・オルショヤの論文は、外国人ならではの視点から『百人一首』研究に新たな光を当てており、博士論文として評価に値するものと認定できる。今後とも研究を継続していただいたい。

博士学位論文内容要旨

2019年2月6日

学位申請者	カーロイ・オルシヨヤ
審査委員	主査 吉海直人 印
	副査 森山由紀子 印
	副査 野村倫子 印
(要旨)	
<p>本学大学院生のカーロイ・オルシヨヤから提出された学位申請論文「藤原定家による『百人一首』再解釈論—英訳を通して見る定家の解釈」(A4用紙142枚)は以下のような構成(目次)になっている。</p> <ol style="list-style-type: none">1章、序論2章、ローマ字表記からみる枕詞の清濁問題<ol style="list-style-type: none">a 「ちはやふる/ちはやぶる」の表記変遷b 「あしひきの/あしびきの」の表記変遷3章、題詠と「あしびき」の歌にみえる詠歌主体の性別4章、英訳からみた修辞法の再解釈<ol style="list-style-type: none">a 序詞「浅茅生の小野の篠原」の再解釈b 掛詞「さよふけて」を中心に5章、時間表現・情景表現による場面設定 —「有明(の月)」と「暁」、「朝ぼらけ」のイメージの再解釈—6章、結論7、付録8、参考文献 <p>タイトルが示しているように、本論は『百人一首』の各歌を撰者である藤原定家がどう解釈していたかを究明しようとしたものである。キーワードとなっている「再解釈」とは、作者や勅撰集の撰者の解釈とは異なる定家独自の解釈という意味である。これは『百人一首』研究においては最新の研究方法であるが、本論はそれを外国人の観点から、多くの「英訳百人一首」の調査・比較・分析を通して、そこに存する問題点を掘り起こし、そこから定家の解釈に迫るという斬新な方法で論じている。これは従来の日本人の研究にない独自の方法である。</p> <p>論文は大きく四部構成になっており、それに序論と結論が付けられている。まず序論で本論の主旨が述べられている。そこで『百人一首』の英訳を分析することにより、従来の解釈とは異なる解釈、今まで気づかなかった問題点を浮き彫りにし、そこから定家の解釈に迫るという方法が提起されている。特に枕詞・序詞・掛詞など和歌特有の修辞法は、英訳に際して様々な問題を孕んでいるので、それを中心に論じることが表明されている。</p> <p>それを受けて2章では古語の表記では曖昧な清濁について、ローマ字では明確に区別されることから、枕詞「ちはやぶる」と「あしひきの」の清濁を英訳と日本人訳との比較を通して論じている。両者には歴史的変遷もあるので、古い『万葉集』の清濁ではなく、定家の時代がどうだったかを究明し、『百人一首』としては「ちはやふる」「あしびきの」とすべきことを論じている。</p>	

続く3章では「あしびきの」歌について、英訳では主語の性別が明記される点を契機として、その詠歌主体が男か女かを問題にし、定家がこの歌を「待恋」と考えていたことから、性別は女性と解釈すべきことを論じている。

4章では、「浅茅生の小野の篠原」という序詞について、日本では同音を導く無心の序とされているが、英訳ではそれを比喻として訳していることが多い。さらに定家の本歌取り歌などを調べることで、定家も「有心の序」として解釈していたことが論じられている。また「さよふけて」に関して、雅経歌には三重の掛詞が考えられているが、赤染衛門歌には掛詞が認められていない。そこで「夜」に「世」が掛けられているという仮説から、「ふけて」に「老けて」が掛けられているとすると、「傾く」を含めてうまく説明できることを論じている。定家は掛詞の拡大をはかっているため、これも可能性としては興味深い。

最後の5章では、「さよふけて」のつながりで、『百人一首』に用いられている時間表現かつ情景表現としての「有明」「暁」「朝ぼらけ」に注目し、英訳にしても日本人の訳にしても明るい時間帯として訳しているものがほとんどだが、「後朝の別れ」として使用されている「有明の月」や「暁」は、むしろ暗い時間帯と解釈すべきことを定家の歌を資料にして論じている。ただし藤原定頼歌の「朝ぼらけ」は、明るくなる時間帯で解釈すべきことを論じている。加えて「朝ぼらけ」は、明るい時間帯も暗い時間帯も含むので、明るい暗いかを判断する意識を持つ必要があることも説いている。

全体を通して英訳の分析を契機とした『百人一首』の再解釈（再検討）をめざした本論は、定家の解釈にまで迫ったものもあり、また日本人には気づかない問題を指摘したものもあり、外国人の研究ではあるものの、『百人一首』の研究において新たな視点から斬新に論じている点、高く評価できる。よって本論文は博士論文に値するものと認定する。今後とも新しい観点からの研究を進めていってほしい。

試問結果の要旨

2019年2月6日

学位申請者	カーロイ・オルシヨヤ
審査委員	主査 吉海直人 印
	副査 森山由紀子 印
	副査 野村倫子 印
(要旨)	
<p>本学大学院生のカーロイ・オルシヨヤから「藤原定家による『百人一首』再解釈論—英訳を通して見る定家の解釈」という論文で博士学位の申請があった。これを受けて公正に審査委員が決められ、主査・吉海直人、副査（内部）・森山由紀子、副査（外部・京都橘大学教授）・野村倫子の三名で厳正に審査にあたった。</p> <p>各委員には事前に申請論文の複写物が渡され、余裕をもって査読した後、2月5日に本学で公開の口頭試問を行なった。その席上で申請者本人に対して論文内容の確認、ならびに各委員から忌憚のない質疑応答が行なわれた。一時間を超える試問であったが、各委員からの専門的な質問に対して、申請者は一つひとつ丁寧かつ適切に説明した。この口頭試問を通して、申請者の学力・人物ともに申し分ないことが十分確認できた。</p> <p>また申請論文は『百人一首』を英訳の分析を通して検討するという斬新な方法がとられており、加えて論の全体が撰者定家の解釈を重視するという明確な方針で貫かれていることがあらためて理解できた。試問を通して論文が独創的かつ斬新であること、随所に豊富な新見が見られるものであることを委員一同で確認した。</p> <p>よって審査委員は全員一致でカーロイ・オルシヨヤの申請論文に対して、博士（日本語日本文化）の学位を授与するに値するものであることを決定した。</p>	